

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	詩と科学：我ら大学で文学は可能か？〈論文〉
Author(s)	丸山, 幹正
Citation	広大言語, 11 : 9 - 11
Issue Date	1971-12-06
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046362">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046362</a>
Right	
Relation	



刻苦精進そのものの中において、生きること——歩むこととのよろこびを静かにかみしめ、おおらかな充実感の中で自分に問いかけて行く生き方への示唆と受け取って、さて考え合わせてみると、春愁と欣豫、一見異なるがごとくにして、実は同じ根から出たものではないだろうか。そして、自己内奥への深い沈潜とより高いものへのあくなき志向、この春愁と欣豫を失わぬところ、暦年命を越えた精神の若さが保たれるのではないか、そうありたい——と、しきりに思うこのごろである。

## 詩 と 科 学

— 我ら大学で文学は可能か？ —

丸 山 幹 正

Roman Jakobsonは1958年、インデアナ大学に於ける学会で、彼の40年にも渡る情熱をかけた新しい詩学の1つの決着として次の如く述べている。

しかしここにいる我々すべては次の事に気付いている。即ちそれは言語の詩的機能について人は幾人かいる、いかなる言語学者も、かつ又言語学的問題に無関心でかつ言語学的方法に不慣れないかなる文学者も共に、**凶悪なアナクロニズム**であるという点だ。」(筆者傍点)

JakobsonがMajakovskijらFuturistの詩人らと共にThe Moscow Linguistic Circleを設立したのは1914年であった。又Kuruteneらの言語学者らはSaussureの理論と並行しつつもその美点を先取して、The Petersburg Society for the Study of Poetic Languageを1916年設置している。このように言語学者らが詩人らと共に言葉との対決に向った理由には、ロシアSymbolismやAkmeismの低迷を一挙に巻き返そうとするロシアFuturistらが新たな言語、リズムを発見せむとする正に血みどろの闘いに入った事と無縁ではない。その最大の論客がかの、Xlebnikovであり、その実践者がさきのMajakovskijであった。その動きは**シム**と呼ばれた。と同時にこのような言語自体へ向き直った姿勢の中には、Gスタイナーの言う如く、**シム**言葉に対する不信感と決して無縁でない要因がある。正に「神も死に」「言葉も死んだ」のである。あれ程の光彩を放った所の古典なるものも見るかげも哀れに崩れ去った。大学で非現実の世界では、あれ程自由に言葉を操つれた者たちも現実には最少の力さえ持ち得なかった。何故か、文学とは何か、文学部とは何か？これがJakobsonのG. Steinerの問いかけではないだろうか。彼らは言葉の真実を新しい仕方で問う所から始めるのだ。「文学とはものそのものでも素材でもなく、素材と素材との関係である。」「そこに於いて我々がとり上げるのは思想ではなく、言語の事実である。」(Noveishei Russkoj poezija) (思想ではないという所に妙なものを感ずるがこれは後に述べる。)こうしてJakobsonやKuruteneらへ、ついに文学をその内在的記述であるとし次のように公式化している。「詩は美学的機能を帯びた言語である。従って文学に関する学の対象は文学そのものではなく、文学性即ちある作品を文学的作品にしている所のものである。」(Noveishei Russkoi Poezija), この筆者がア

ГРУЕМ

ンダーラインを付したものが当初 Jakobson によって (手法) と呼ばれた。この概念規定は曖昧であった所から 1923 年の On Czech Verse では <sup>Начиние</sup> (圧迫) という概念が取って代ったがこれも N. S. Trubetzkoy や Zj Nrumunskij (本年死す) に、何か言葉を圧えつけ不自然な <sup>感</sup> じを与えんとして批判され、Jakobson 自身も 1959 年にはこれを放棄している。そして最も新しい考え方は "Tes chats" de Baudelaire に於いて如実に看破される如く積層的分析方法でありこれは Husserl によってもたらされた。即ち詩は音韻、音声 Syntax, Semasiology などの level を積み重ねた構造をしていると考えられる。この「拙」の分析では、オイデブス神話などで文学的にも特異な視野を持つ人 <sup>20</sup> 学者 Lévi-Strauss と共著である点如何にも構造主義らしい。意味論を彼が担当していることは Jakobson の他の著作 (例えば Sonnet 129. Baudelaire の Spleen etc) を一読すれば直ちに看破されよう。そして上述の如く、彼は文学の思想は除外すると言っているが、この Lévi-Strauss が 1 枚加わるることによって最近この深みに下りて来たように思われる。彼はきき手に伝わる言語機能を、1. 指示機能、2. 換情機能、3. 勧誘機能、4. 超言語、5. 換起機能、6. 詩的機能に区分して「詩的機能は等価の原理を選択の軸から結合の軸へと投出する」(Linguistics and Poetics P359) と考え <sup>て</sup> いる。これは Saussure の「統合」と、「連合」を読み合わせ、Valéry のリズム論 (筆者は卒論の際これによって多くの示唆を得たが) とその repetition の概念或いは G.M. Hopkins の parallelism の概念と比べれば理解をたすけられるであろう。又選択は similitude の原理に、結合は Contiguity の原理に基づき前者が metaphor を後者が metonymy を誘発し易いことは容易に承知されるであろう。このように repetition や parallelism によって言う所の詩の音楽性 (end rhyme, <sup>a</sup> alliteration, consonance, dissonance など古典的な諸形式をも含めたリズム) が齎されるのであるが、Jakobson は音響学 <sup>と</sup> 達に見られるような音への偏向を警戒して音と意味がいかに深い調和をもたねばならないかを示す。(リズム論には詩人の例からも又 Jakobson のような言語学者からも色々に出されているが、日本では朔太郎のすぐれた経験的リズム論がある。cf 「無からの抗争」) このようにして完成された 1 編の詩のもつものは ambiguity であるがこれを本格的に極めたのが <sup>William</sup> Empson の「Seven Types of Ambiguity」である。このように Jakobson の最も新しい積層法の考え方は所謂今迄の文芸批評とか文体論 という名で示される分野とは甚だ異質のものであり、先に見たように Jakobson は文学をその内在的価値の研究の記述とし、言葉の芸術の客観的、論理的な分析を目的とする領域を設定して、個人の印象的恣意的意見を強制する批評家に反旗を翻したのであった。我々は言葉の <sup>し</sup> なしさを知っている。文学を死に追いやった人間共のたった最後の道はこの logic であった。正しい前提から出発する命題の帰結は正しいのである。このような文学を cold literature と呼ぶものもあるであろう。 <sup>structurism</sup> 「狂気思想」と呼ぶものもあるだろう。世界はそれ程混沌に満ちている。ただ <sup>は</sup> 現在の学問の極細分化と専門化によって複雑な現実コミット出来なくなった為に再び人間を統合的に把握したいという切実な希求から謂わば必然的に結果したといえよう。Jakobson を始め

ユコ派のグループやフランスに於ける文学者の側からの試みである Nouveau Roman の勇者達も言語との対決を深めている。かつ又 Jean Piaget らの心理学者は、<sup>S</sup>structurism の弱点である Mental なものへの接近を同じに観点に立ち乍らも実現しつつあるように思える。Rimbaud に象徴される行動とその要点の1つとして沈黙の問題にも G. ~~Steine~~<sup>S</sup>や Beckett などの冒険者達が居る。(これらは卒論にも一応述べておいたが) Jakobson 詩学を乗り起えるには彼が極度に閉込めざるを得なかつた領域に、これら冒険者達によって連鎖の絆が打ち込まれなければならない。文学と言語学の連鎖は Jakobson の50年にも渡る研鑽によって確立された。Einstein もガウスからではな~~く~~むしろドフトエフスキーから多く影響を受けていると自ら語っている。言語学と人類学の連鎖は Levi = Strauss によって齎らされているし、心理学を始め他の隣接科学との好意的な連帯も生じなければならない。(我らの文学部も考えなければならない事は多い。) 伴し人の中には時に詩人がいる。人を信ぜしめる為に logic は要らない。只人はあたかも遙か古人の「言葉に靈がある」と信じていた丁度その如く、彼の言葉を信じさえすればいい。そのような詩人が人の中には数少なに住んでいる。Lautréamont は人の連帯を遠い昔知っていた。人の感性は極限に於いて一致すると。日本にも同じことを言った詩人に宮沢賢治が居た。Rimbaud も単なる奇人ではなかつた。彼らはすべて空ろな權威を擧<sup>げ</sup>弄しつつ、行為が言葉になり言葉が行為になり、沈黙を心得た。彼らにとって「詩は万人によって歌われなければならない」かつた。ラテン語もフランス語も英語も独語もすべての言葉はすべての人々に本来語りかけるやさしさを持つはずだ。

失なわれて言葉はどうすれば美しい真実になるのか、我々は一身を徒してもそれに近づかねばならない。

Mirum :

dum labitur amne , flebile nescio quid queritur lyraꝫ fle-  
bile lingua murmurat exanimis , respondent flebile ripae .  
…… ああ何という驚異だろう——Orpheus の五体が中流を流れて行く間に琴はもの悲しい音を立てた。命のない舌はもの悲しげに囁いた。もの悲しげに岸が答えた。』